

小学校 図画工作科 部会

部会長 川崎町立池尻小学校 校長 金子 祥二
実践者 福智町立市場小学校 教諭 勇 裕成

1 研究主題

「生きる力」を育む図工科学習指導の研究
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～

2 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

現代社会は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことがますます重要になってくる。

この激しい社会を担う子どもたちには、①生きて働く「知識・技能」、②未知の状況に対応できる「思考力・判断力・表現力等」、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」資質・能力が求められる。そこで、学校においてこれらの資質・能力を育むためには「社会に開かれた教育課程」の理念に立脚した組織運営の改善と授業改善を図ることが重要であるとし、「カリキュラム・マネジメント」と「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善が提起されている。

(2) 図画工作科の目標から

図画工作科のねらいは、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」ことである。

図画工作科の学習は、自らの感性を働かせながら、造形的な創造活動の基礎的な能力を発揮して表現や鑑賞の活動を行い、つくりだす喜びを味わうものである。このような過程は、その本来の性質に従い、おのずとよさや美しさを目指すことになる。それは、生活や社会に主体的に関わる態度を育てるとともに、伝統を継承し、文化や芸術を創造しようとする豊かな心を育てることにつながる。

新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善を図るにあたり、各教科固有の「見方・考え方」を働かせることを深い学びへつなげるものとして重視している。図画工作科では、これを「造形的な見方・考え方」として、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」としている。「造形的な見方・考え方」の特徴は、知性と感性を共に働かせて対象や事象を捉えることである。これを身体を通して捉えていくことが、他教科以上に図画工作科が担っている学びであり、児童の

「生きる力」を育む上で重要な働きをしていると考えられる。

(3) 児童の実態から

本学級の児童は、明るく元気のよい児童が多い。図画工作科に対しては、創造的な活動が苦手な児童が多く、初めて取り組むことに抵抗を持つ児童もいる。また、ていねいな作業ができる児童が多いが、最後まで集中できずに適当に作品を仕上げってしまう児童もいる。

自分の作品が完成したら終わり、友だちの作品に目を向けることはあまりなく、新たな考えを取り入れようとする姿はあまり見られない。また、木材を活用した造形の経験がなく、中には木材に触れたこともないと答える児童もいる。

このような児童の実態から、本実践の「丸太アート」で、木材に触れ、木材のよさを活かし、作品を作り上げることで、感性や想像力を働かせ、自分のイメージをもちながら価値をつくりだせるようにしたいと考える。

また、イメージを考えたり、友だちの作品を鑑賞したりする中で、友だちとの交流を重視し、自分と異なる考え方に触れて、自分の考えを形づくったり、広げたり深めたりすることにつなげていきたい。

3 主題の意味

(1) 「生きる力」を育む学習指導とは

「生きる力」を育む学習指導とは、各教科、特別の教科道徳、総合的な学習の時間及び特別活動において、子供の発達段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げる3点の資質・能力を偏りなく育成できるような授業づくりを行うことである。

- ① 生きて働く知識・技能の習得させること。
- ② 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- ③ 学びに向かう力・人間性等を涵養すること。

(2) 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」とは

「主体的な学び」では、子ども自身が興味をもって学習に積極的に取り組むこと、目的を認識し、学習へのふりかえりと見通しをもって学習活動に取り組むことが重要である。

「対話的な学び」においては、自分と異なる考え方に触れたり、向き合ったりすることで自分の考えを形づくったり、広げ深めたりすることにつなげていくことが重要である。

「深い学び」では、身に付けた資質・能力が活用・発揮されていくことでさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要である。

学習活動においては、この3つの学びが互いに関わりながらバランスよく実現していくように授業を改善していかなければならない。

また、各教科でこの授業改善を図るにあたり、各教科固有の「見方・考え方」を働かせることを深い学びへつなげるものとして重視している。図画工作科では、これを「造形的な見方・考え方」として、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」としている。この「造形的な見方・考え方」の特徴は、知性と感性を共に働かせ

て対象や事象を捉えることである。身体を通して、知性と感性を融合させながら対象や事象を捉えていくことが、他教科以上に図画工作科が担っている学びであり、そのことを意識して実践を行っていかねばならない。

4 研究の目標

図画工作科における「主体的・対話的で深い学びの実現」のために、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わう学習活動のあり方を究明する。

5 研究仮説

図画工作科の学習指導において、次のような手立てをとれば、児童は感性を働かせながら意欲的に活動し、主体的・対話的で深い学びへとつなげることができるであろう。

- (1) 児童が表現意欲をもって取り組むことができるように、目的を明確にする。
- (2) 児童の考えを広げるために、友だちと意見交流をする時間を設定する。
- (3) 児童の資質育成のために、友だちの作品のよさにふれる鑑賞活動を設定する。

6 研究の計画(授業の計画)

(1) 題材「丸太アート」

(2) 題材の目標及び指導計画

単元	丸太アート		総時間	4 時間	時期	10月
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 見たこと、感じたこと、創造したことから、表したいことを見つけて、表そうとする。(関心・意欲・態度) ○ 木材に触れたり観察したりして、自分が表したいことを見つけてイメージをもつ。(発想・構想の能力) ○ 木材の形や木目などの特徴を活かし、自分なりに色や形を工夫して、表現する。(創造的な技能) ○ 自分が感じたことを話したり、友人の考えを聞いたりしながら、いろいろな表し方や感じの違いに気づく。(鑑賞の能力) 					
指導計画	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点			
第1時	○どんな作品にしたいかアイデアスケッチに表しながらイメージしよう。	○木材を見て、木材の形や木目を活用して、できあがりのイメージをもつ。 ○イメージしたことを、紙に下書きをする。	○イメージをもつことができるように、形や木目を観察させ、形からいろいろなイメージを持たせる。 ○多様なイメージをもつことができるように、気づいたことを友だちと交流させる。			
第2時 第3時	○考えたイメージをもとに、木材に絵を描こう。	○下書きをもとにして、木材に絵を描く。 ○絵に色をつけたり、縁取りをしたりして、作品を仕上げる。	○意欲を継続させるために、適宜作品の評価を行ったり、アイデアを伝えたりする。 ○よりよい作品にするために、友だちのアイデアを取り入れ			

			てもよいこととする。
第4時	○友だちの作品のよいところを見つけ、発表しよう。	○作品の鑑賞会をする。	○お互いの作品のよさに気づくことができるように、鑑賞の視点を確認する。

7 指導の実際

【第1時・・・導入】

「丸太アート」を行うにあたり、次の条件を確認した。

○与える条件

- ・半割丸太にクーピーで絵を描く。
- ・できあがった作品は自宅に飾る。

○考えさせる条件

- ・木材をどのように使うか。(縦か横か、どの面に描くか)
- ・木材に描く絵の題材は何にするか。

○作成手順

- ①題材を決める。(木材を観察し、どんな絵を描くか考える。)
- ②下書きをする。(プリントにイメージを描く。)
- ③絵を描く。(イメージをもとに絵を描く。)
- ④色を塗る。(クーピーで色を塗る。)

本単元の指導にあたっては、はじめに目的を伝えた。できあがった作品は、自宅に持ち帰り飾る、いわゆるオブジェにすることを伝えた。そのことから、どこに置こうか、誰にプレゼントしようかなど、いろいろな意見が出た。

次に、木の手触り、木の形、木の模様など、注意深く観察し、自分のイメージを考えさせた。下書きの紙に、アイデアスケッチをしながらイメージを考えていった。

また、考えている途中で、意見交流を行い、友だちの意見を参考にして、新たなイメージを考えたり、自分のイメージを広げていったりする児童もいた。

木材に絵を描くという初めてのことに驚きがあったようだが、いつもとちがう新しいことに意欲的であった。

【第2. 3時・・・制作】

考えたイメージをもとに、木材に絵を描かせた。はじめは、木材が半円形のため安定して書けなかったり、鉛筆でうまく書けなかったり、要領がつかめなかったが、だんだんと書けるようになって行った。

下絵が書けたら、ペンでなぞらせ、クーピーで色塗りをさせた。やはり木材に色を塗るということで、悪戦苦闘する姿が見られたが、どの児童も最後まで諦めずに仕上げた。

この時も、友だちとの交流を行った。友だちと声を掛け合いながら、アドバイスを



【写真1 ワークシート】

したり、アイデアをもらったりしながら、変更したり、書き加えたりしながら作品を完成させた。

作品が完成したら、【写真1】のワークシートに、「作品の題名」と「工夫したところ」と「感想」を書かせた。

作品は、【写真2～5】のようになった。



【写真2 木の模様を生かした作品】



【写真3 木の形(長方形)を生かした作品】



【写真4 飾ることを考えた作品】



【写真5 好きなキャラクターを描いた作品】

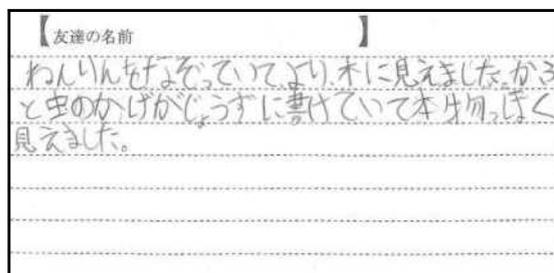
【第4時・・・鑑賞】

完成した作品の鑑賞会を行った。鑑賞の視点を確認し、ワークシートに書かせた。

木材の形や模様を活かしているかを視点
に、友だちのよいところを書かせた。

全体の雰囲気・色・形・絵の構成・それぞ
れの工夫など、【写真6】のように、よいと
ころやまねしてみたい所を書かせた。

また、【写真7】のように、作品写真を貼
ったワークシートを教室に掲示し、作品は



【写真6 鑑賞のワークシート】

福智町の文化祭に出展し、多くの方に観ていただいた。【写真8】



【写真7 学級掲示の様子】



【写真8 福智町文化祭の様子】

8 研究のまとめ

本研究のまとめとして、事前事後の児童の様子を比較した。

○事前の児童の様子

- ・自分だけで考え、自分のイメージで作品を作成していた。
- ・鑑賞では、よいところをなかなか見つけることができなかった。

○事後の児童の様子

- ・友だちとの交流を通して、よりよいアイデアを持つことができた。
- ・鑑賞では、友だちのよいところをたくさん見つけることができた。

児童の変容は明らかであるが、導入において、目的や条件を明確にしたことで、できあがりイメージし、意欲を持って取り組むことができたと考える。また、制作・鑑賞において、友だちとの交流する時間を設定することで、自分の考えを広げて、作品作りに活かしたり、お互いのよさに気づいたりすることができたと考える。

今回、「主体的・対話的で深い学びの実現」のために、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わう学習活動のあり方を究明ということで、実践を行ってきた。

成果は、ほんの僅かではあるが、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の一步になったのではないかと考える。

9 成果と今後の課題

(成果)

- 木材に触れる、木材に描くといった、普段できない体験をすることができた。
- 木材の模様や両面を活用し、一人ひとり異なった絵を描くことができた。
- 鑑賞を通して、お互いの作品のよさに気づくことができた。
- 目的や条件を明確にすることで、できあがりイメージして取り組むことができた。

(課題)

- 木材に絵を描くだけで終わったため、活動が単純になってしまった。
木材を自分の好きな形に切る、彫るなどの活動を仕組む必要がある。

◎ 参考文献

小学校学習指導要領解説 図画工作編 文部科学省

図画工作 学習指導書指導案編 開隆堂
開隆堂出版株式会社 ホームページ 資料